

退職して2年になろうというのに、いまだに「専門はなんですか」と聞かれることがある。正直言つて、これが一番答えに窮する。

自分からはめつたに言わないが、蓬髪でよれよれの服をきていることがほとんどなので、周りからは実社会では役立つことをしてこなかった元大学教員に違いないと見破られているのだ。そんなときに、中小企業とEU経済の両方です」と言えば、ま

ず怪訝な顔をされる。したがって、その時の雰囲気でもどちらかしか言わないことにしている。それでも、たまに正直言えば、長い話になりかねない。

大学院の8年間(博士課程を6年間も過ぎました)ではイギリス資本主義研究をマルクス経済学に基づいてやってきた。それしかやってこなかったといえるかもしれない。いっこうに成果を出せないで、恩師は研究のフィールドをEU研究に拡げてくれた。それ以来、EUと旧植民地諸国との関係を追っかけることになってしまった。その研究は本学に奉職したのち、運よくこの研究叢書の第2巻『EUの開発援助政策』(2000年3月)として20年以上も前に

自著紹介

大阪商業大学比較地域研究所研究叢書第22巻

前田啓一・池田 潔・和田聡子編著

激動する世界経済と

中小企業の新動態

(御茶の水書房、二〇一三年三月一〇日)

前田啓一

纏めることができ、大阪市立大学から博士号(いわゆる論博)を授与された。その縁もあって、ひところはいくつかの大学でヨーロッパ経済論の非常勤講師を務めていた。

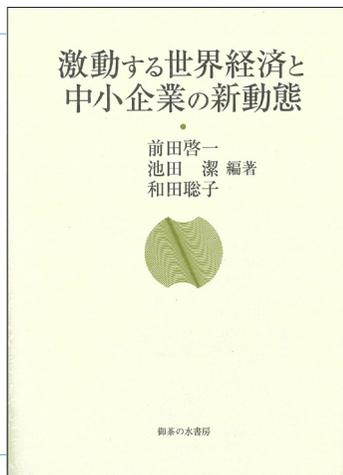
一方、大学院博士課程を終えたのち、思いがけず大阪府の中小企業研究所に職を得ることができた。この職場(大阪府立商工経済研究所)は旧満州鉄道調査部の流れを汲む人たちが設立したものでマル経を背景とする先輩諸氏が数多くおられた。中小企業研究では全国的にその名を知られており、それなりに自分を(無理に?)納得させ就職した。こうして、私の研究にあらたに中小企業論が付け加わることになった。すでに子供がいたので、生活する上でやむを得なかったのだ。ところが、職場は行政改革の波に襲われ組織再編を余儀なくされるに至り(大阪府立産業開発研究所という奇妙な名に変更)、しかも研究内容にまで役人から口出しされるが多くなる。

もつとタイムリーで役に立つ研究(誰に役立つというのか)、研究よりも短期的な調査の重視をの云いで、彼らの言う役に立たない経済学よりも、経営者に有益とされるアプローチを迫られるようになった。

この頃から私は(職場が嫌になったこともあり)、早朝起床ののち一時間半くらいはEU経済に関係する英仏などの外国語文献に挑

み、通勤ののち昼間は(睡魔とたたかいながら)業務としての中小企業での面談とレポート執筆という日々を過ごすことになった。当初は苦しいことも多かったが、それも習い性となる。そのような生活はやがては大学教員としての期間も継続する。午前中はEU経済論を、そして午後は中小企業論にいそむこととなった。このような、オオタニならぬ二刀流生活は本学退職まで長く続き、退職後には先祖帰りして(人には本籍地に戻ったと言っている)ようやくEU経済論に専念する日々を過ごすことができるようになった。周りには、もう中小企業論はやらないよと伝えているのだが、それでもなかなか解放されない。相変わらず、疲れる日々が続いている(自業自得かもしれない)。さらに10年くらい前には研究分野から派生し、ベトナム経済(中小企業)研究も付け加わってしまったのだ。

今回、二人の畏友、池田 潔先生(大阪商業大学)と和田聡子先生(大阪学院大学)の心配りのもとで、2021年10月に古稀を迎えた私の記念出版の企画をすすめてくれた。この折にも、私の個人的事情を斟酌くださり、本書の構成が欧州社会・経済、アジア社会・経済、中小企業との3部に分かれるというきわめて変則的な構成になったのもそのためだ。本書執筆の12名の方々はいずれも私がこれまでの



経緯から折々に親しくお付き合いくださっている先生方である。執筆者のなかにはマル経をベースとする数人の方も混じっている。また、経済学と経営学の双方のアプローチから執筆陣が構成されている。なにより、私自身がマル経でしかも退職している身でもあり、お二方には多大な迷惑をかけてしまったことをあらためてお詫びしておきたい。まさに滅茶苦茶な企画だったと言っしかない…。ただ、率直に言えば、当初私は、EU、アジア、中小企業で三つのシリーズ、つまり上・中・下とか1、2、3とかにしたくないと言う気持ちもあったのだが、それはとうてい無理だと思い、このような一冊に3部を詰め込んでしまったのだ。本書の構成(目次)を記す余裕がここにはないので、執筆者のお名前のみを記載しておけば、われわれのほか、鈴木清巳、松永 達、豊 嘉哲、許 伸江、閻 和平、井出文紀、糸野博行、町田光弘、文能照之、関 智宏の皆さんである。

2020年代前半のこの時期において、世界各地では戦争により平穏な市民生活はむろん、企業の日常活動も脅かされる時代となった。日本国内では極端な規制緩和方針による市場超重視の経済運営が長く続いた結果として若い世代を中心とする非正規雇用の蔓延と労働市場の歪みと限界とが露呈している。働

き方改革によっても問題はいつこうに解消されず、その日の暮らしに事欠く人々が多数生まれるに至った。日本や欧米はなぜこのようなギスギスした、弱者に冷たい国々になってしまったのか。また、現代の企業間競争は市場での厳しいその展開を通じて、他方で同時に深刻な地域間格差も生み出し続けている。本書の「はしがき」で、私はこのように大言壮語し危機感を表明したものの、その研究成果ははたしてどのようなものであったのか。大学教員の現場では、世の大勢に迎合しそしてまたマスコミ受けを狙うのではなく、言葉と文字のメスでもって、それらへの批判的精神の醸成がもっとも必要とされるのだ。このような批判的態度が欠如すれば大学教員の存在意義はないともいえるのではないか。

なお、この短文執筆時点で、運よくすでにお二人の方から書評をいただくことができた。中小企業経営論の立場からは田代智治先生（長崎県立大学）による『中小企業季報』（大阪経済大学中小企業・経営研究所、2023年11月、No.1）への掲載がある。そのなかで、[△]中小企業を研究対象としてとりあげますれば中小企業研究なのかとのある方の発言を紹介されており、私はその指摘をきわめて重要と考える。なぜなら、それは中小企業の問題



ベトナム北部の世界遺産チャンアンでのボートクルーズ
(2023年2月)

腰を痛めた前田を懸命にマッサージするベトナム人ガイドさん（ベトナムの古都ホアールにて、2023年2月）

性研究（そしてそれは資本主義批判への契機ともなりえる）を軽視する風潮への警鐘でもあるからだ。そして、田代さんからの私自身がどう考えるのかという総括的分析が抜けていくとの指摘はまさしくその通りであった。たしかに、本書の末尾あたりで少しでも触れるべきであったと反省しきりである。さらに、同志社大学元教授の嶋田 巧先生からは世界経済論の立場からの書評が届く（当比較地域研究所の『地域と社会』次号に掲載予定）。ここでは各章についての（時にはやや辛口の）コメントのほか、その最後に「本書により地政学との関連や結合を特質とする現代世界経済における、広い視野のもとでの政治・経済的アプローチの必要性を改めて感じた」との総評をいただいた。加齢のせいか最近はやや大言壮語気味の私にとっては、望外の喜びとしたい。ただ、地政学的な観点が過ると研究の客観性や科学性が失われることについても留意していきたいと自戒もする。若い頃に読んだ文章のなかで、ある大家が、良い子は地政学をやってはいけな、と記していたのがいまだにこびりつき、拭い去れないのだ。

（本学名誉教授・特別教授）